

## 季節のたより ゆく鳥くる鳥

本多 里奈

自然の博物館の周辺には様々な鳥が生息していますが、季節によって見られる鳥は異なります。ここでは、博物館の周辺で見られる鳥を季節ごとに紹介します。

春なつどり－夏鳥到来！－

春には、夏鳥（繁殖のために日本に渡ってくる鳥）が次々と飛来します。博物館や長瀬の商店街でも営巣するツバメはその代表格です。オス同士がメスを巡って小競り合いする様子や、巣の中にもっちり詰まったヒナなど、命の勢を感じる春らしい光景が見られます。博物館の向かいにある月の石もみじ公園では、鮮やかなキビタキや可愛いコサメビタキが美しい声を響かせます。

数カ月滞在する夏鳥が多い中、短期間だけ長瀬に現れる鳥もいます。オリーブ色が美しいビンズイは、繁殖地である標高の高い山地に向かう途中、数日だけ博物館周辺に滞在します。見られると嬉しくなる、期間限定の春の鳥です。



写真1. 黄色が鮮やかなキビタキ(上: 5月撮影)とシックな姿のビンズイ(下: 4月撮影)



写真2. ツバメの親鳥とヒナ。巣が窮屈になる頃には、夏の気配がしてくる(6月撮影)

## 夏－鳴かぬなら それでもいいかな ホトトギス－

暑い暑い埼玉の夏。博物館周辺も気温は毎日30℃を超え、酷いときには40℃まで上がります。ここまで暑いと鳥もヒトもほとんど動くことができません。そのため、見られる鳥も聞こえる鳴き声もごく僅かです。暑さが若干和らぐ夕方になると、「特許許可局」と聞きなされるホトトギスの声がようやく聞こえてきます。鳥の声だ！と喜びも束の間、ホトトギスは一体いつ休むのかと思うくらいに、大声で延々と鳴き続けます。ミンミンゼミの「ミンミンミン」と同じように、「特許許可局」=暑いと刷り込まれ、声を聴くだけで気温がぐっと上がった錯覚がするほどです。いてほしい、でも、少し静かにしてほしい…。そんな複雑な気分を抱かせてくれます。



写真3. 日陰で口を開けているヒヨドリ。鳥は汗をかくことができないため、体温下げのためにイヌと同じように口を開けて浅くて速い呼吸をする(7月撮影)

### 秋－秋の味覚を楽しむ鳥たち－

灼熱の夏を耐え抜くと、待望の秋がやってきます。この頃になると、ツバメなどの夏鳥は旅立ち、代わりにツグミやマガモなどの冬鳥（越冬のため日本に渡ってくる鳥）がやってきます。様々な鳥が行き交うにぎやかな秋は、鳥の食事シーンを観察する絶好の季節でもあります。カキの実にはメジロが集まり、時にはキツツキの仲間であるアオゲラもやってきます。博物館のカエデの森では、ヤマガラやシジュウカラがハクウンボクなどの木の実を集め、その場で食べたり冬に向けて貯食する様子が見られます。



写真4. カキの実を食べるメジロ（9月撮影）



写真5. 木の実をくわえるヤマガラ。貯食場所を探して、しばらく辺りをうろろしていた（10月撮影）

### 冬－耳をすませば鳥の声－

寒さが厳しく、餌も少なくなるせいか、冬は鳥の姿がまばらです。しかし、空気が冷たいため、遠くの鳥の声までよく聞こえます。耳をすましてみると、「ヒツヒツ」とジョウビタキの澄んだ声や「ヒーヒー、チリチリチリ」とヒレンジャクの鈴のような声が聞こえてきます。声を頼りに周囲を探してみると、美しい鳥たちの姿が見られるかもしれません。



写真6. 枝にとまるヒレンジャク（3月撮影）

### ゆかない鳥・こない鳥

ここまで各季節に見られる鳥を紹介してきましたが、実は博物館周辺で見られる鳥の多くは渡りをしない「ゆかない鳥」、いわゆる留鳥（りゅうちょう）です。およそ30種の鳥が一年中生息しています。「ゆかない鳥」の最大の魅力は、季節によって様々な行動や姿を見せてくれることです。例えば、セグロセキレイでは、春には子育ての様子、夏には木の上で暑さをやりすごす様子、秋には寒さでまんまるになった可愛らしい姿、冬には縄張り争いをする凛々しい姿を見ることができます。

一方で、博物館の周辺の環境なら飛来しても良いはずなのに、なぜか「こない鳥」もいます。その代表例が夏鳥のムシクイ類です。非常に特徴的な声でさえざるため、いれば気付くはずですが、少なくともこの2年間で記録はありません。いつか「くる鳥」になるかも、と期待しながら「ゆく鳥くる鳥」を観察しています。



写真7. セグロセキレイの親子（5月撮影）

博物館にお越しの際は、展示と併せて、周辺の散策や「ゆく鳥くる鳥」、そして「ゆかない鳥」をお楽しみください。

（ほんだ りな・学芸員）